

「落語と私」 その伍

三代目 橘ノ百圓

前号のお約束通り、圓師匠(扇馬時代も含む)から付けて貰った噺の解説を致します。先ず、十六の噺ですが、教わった順はバラバラです。

一、たらちね 二、蝦蟇の油(これは字が違っていました) 三、殿様団子 四、長短 五、鼻欲しい
六、青菜 七、蔵前駕籠 八、鹿政談 九、蛙茶番 十、蛇含草 十一、強情灸 十二、南瓜屋
十三、初天神 十四、禁酒番屋 十五、神奈川宿 十六、馬の田楽 です。

一、たらちね(垂乳根)(たらちめ)

この噺は、大阪根多の延陽伯を東京に移したもので、代表的な前座噺です。似た噺に、皆様ご存知の「寿限無」がありますが、共に長い名前が出て来る、一種、噺家に成りたての前座の口馴しの為ですかネ!? 「あらずじ」

大家さんに勧められ、嫁を貰う事に成った八五郎、歳は若いし、器量は十人並以上など、好条件、八五郎も気に入ったのだが、只一ツ言葉が丁寧過ぎて、何を言っているのか解らず、又、大家さんが、嫁さんの名前も伝えずに帰ってしまった為に、名前を訊くのだが、「自らことの姓名は、父は元京の産にして、姓は安藤名は慶三、^{あざな}字を五光^{ごこう}、母は千代女と申せしが、我が母三十三歳の折、ある夜丹頂の入るを夢見て、我わをはらめるが故に、たらちねの胎内^{いで}を出し時は鶴女、鶴女と申せしが、それは幼名、成長の後これを改め、^{きよじよ}清女と申しはべるなり」と長い口上、これを全て名前と勘違いした八五郎、その名を紙に書いて貰い、「こんな長い名前じゃ火事の時、起すのが大変だ！」などと一人で訳の分からない事を言い、翌朝、食事の仕度を済ませた清女さんが、八五郎の枕元で「ア〜ラ我君^{わがきみ}、ア〜ラ我君、もはや日も東天に出現ましますば、うがい手水^{ちようず}に身を清め、神前仏前^{みあかし}に御灯をたてられ、ご飯召し上がって恐惶謹言^{きようこうきんげん}」と来た。そこで八五郎は、「何！飯^くを食うのが恐惶謹言、なら、酒を飲んだら、^よ因^{くだん}って件^{ごと}の如しだ」(酔って、クダをまくが如し)が落ですが、この会話は今では通じませんので、各噺家さんが色々と変えています。

「扇馬師匠の説明」

「父は元京の産にして…」これは京都とは言わずに「京の産」と言うべきで、京は天子様のお住い所、わざわざ都^{みやこ}を付ける事は無いテな事です。又、新所帯の清女さんが、八五郎と一夜を過ぎた翌朝は、少し恥らいを持ち、女らしさを出す様に言われましたが、学生だった私には、その様な仕草が出来るはずも無かったです。只、その気持ちを忘れずに高座に上がれと言ってくれたのではないのでしょうか？

二、蝦蟇の油

この噺も月報に書きました通り、二番目に教わったもので、「売口上」が長い言い立てです。マア聴か

せ処ですネ、では、その口上を書いてみます。

「あらすじ」

大道商の蝦蟇の油売り、人通りの多い場所に店を広げ、「サアサア、サアサアお立合い、ご用とお急ぎの無い方はユックリと聞いておいで、遠音山越笠の内、聞かざる時は物の文色理方良し悪しが判らない、山寺の鐘ゴウゴウと鳴ると言えど、童子一人来たりて鐘に撞木を当てざれば、とんとその音色が判らない、手前持ち出したる藁の内、一寸八分唐子ゼンマイの人形、細工人は数多在ると言えど、京都にて守随、大阪表にて竹田縫之助、近江の大椽藤原朝臣と在る、手前のは竹田の津守細工、喉に八枚の歯車を仕掛背に十二枚の小鉤を背負い藁の内に入れ大道に置く時は、天の光と地の湿りを受け陰陽合体し、パッと蓋が取れツカツカツと進む虎の子走り虎走り、だがねお立合い、投げ銭、放り銭はお断りする。イヤ物貰いじゃないから断るネ！では、投げ銭放り銭を貰わずに何を渡世にするかと言うと、手前長年渡世とするはこれに有る。軍中膏は蝦蟇の油、そんな蛙は縁の下や流しの下に居ると言ったお方が在るが、それは只のヒキ蛙、薬石効能の足に成ら無い、四六の蝦蟇だ四六の蝦蟇、四六、五六は何処で解る、前足の指が四本、後足の指が六本、これを合せて蟬噪は四六の蝦蟇。この蝦蟇の住る所はこれより北、北は筑波山の麓にて大葉子と言う露草を食って育つ。この油を取るには四方に鏡を張り、下にと金網を置く。これへ蝦蟇を追い込む、蝦蟇己の姿が四方の鏡に映るのを見て、己で己の姿に驚き、タラーリ、タラーリと脂汗を流す。これを金網の下に抜き取り、笹の小枝をもって三七、二十一日の間焚きしめ、赤いが辰砂、椰子油の油、テレメンテイカにマンテイカ、いや、斯様な油を練り合わせて拵える。この油の効能はヒツギ、ガンガサ、ミョウバイソウ、輝、皴、霜焼の妙薬、とまだ在る。大の男が畳の上に転がり回って苦しむのが虫歯の痛みだネ虫歯の痛み、虫歯の痛みだったら心配は無い！この薬を紙に着け空に詰め、歯をグッと結ぶ時には熱つい涎が流れると共に、歯の痛みが去るんだネ歯の痛みがネ、とまだ在る、刃物の切味を止めるんだ刃物の切味を、手前持ちい出しましたるは、粗末な品では有るが、端けや、鈍とは違う、抜けば玉散る氷の刃、只能書だけでは具合が悪い、紙を切ってご覧にいれよう、紙をネ、一枚の紙が二枚と切れる、二枚の紙が四枚、四枚が八枚、八枚が十六枚、十六枚が三十と二枚、三十二枚が六十と四枚、六十四枚が一束二十八枚と切れる、イヤ嵐山落花の形、斯様に切れる刃物でも、この薬を一着けつける時は、鈍同様となる。押しても引いても切れないネ、だが大道商の面の皮は厚いと言う、いや口の悪いお方が厚いと言う、二の腕だったら変わりは無かろう、二の腕なら、ホラ押しても引いても切れないネ、だが油屋、その薬は刃物を鈍にする薬かとネ!? 卑しくも大道商はしていても、金看板ご免の蝦蟇の油、そんな薬は売らないネエ、これを一度拭き取る時は、元の刀へと戻る。チョッと触っただけでこのくらい、切れた！切れても心配は無い、切れたら斯様に拭き取る、この薬を一着けつける時は、煙草一服するかしないかの内に血が止まるんだよ、血が、ホラ、止ったネ、ではこの薬を幾らでお分けするかと言うと、宿元の販売が一貝が二百、出張ってのご披露故一貝を百と負けよう、百や二百はご尽益無い事に用いるが、この貝一貝有ればどんな重宝か分からない、ヘイ有難うございます。」と飛ぶ様に売れたんだそうで、この油売りが儲けの金で大酒を飲み、再度大道に立ち失敗する嘶ですが、これは林家の形で、三遊とは口上も仕草も違います。前述した様に大道商いですから、声を大きく、仕草も大きくハッキリと少しくサイ位に演る様にと当時の扇馬師匠から言われました。何方かこの「啖呵売」の台詞を覚えて、忘年会などで演ってみませんか!? 宜しければ、私が仕草共々ご指導致しますヨ。

また二ツの噺の紹介で、原稿枚数を超過してしまいました。テな訳で申し訳ございませんが、今回は「落語豆知識」はお休みと言うことでご勘弁ください。

～お知らせ～

第2回

“新木場寄席”

平成30年6月21日(木) 午後6時

開口一番 橘ノ 百圓

紙切り 林家 花

お仲入り

落語 柳家 権太樓

おたのしみ



ガマの油売りの口上

出典：<https://ja.wikipedia.org/wiki/>